

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スペイン語のserとestar
Author(s)	鈴木, 覚
Citation	ニダバ , 8 : 10 - 14
Issue Date	1979-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046386
Right	
Relation	



スペイン語の ser と estar

鈴 木 寛

は じ め に

従来の文法においては、形式や機能の共通性・類似性を以って品詞の分類を行うのが通例である。例えば、本論で扱うスペイン語の ser と estar は、両方とも copula や存在を表わす語として、しかも両方とも人称や時称や法による語尾変化を持っているところから、共に動詞として分類されている。そして両者の区別については、個々の言語現象に基くこれまた形式主義機能主義的方法に頼っているのが現状である。

品詞の分類に当っては表面に現れた形式的機能的類似性に迷わされずに、各語の背後にある、対象から認識を経て表現に至る過程的構造を見極めなくてはならない——これは故時枝誠記博士の遺した、幾ら強調してもしすぎることもない教訓である。構造主義言語学や変形文法では、ラングからパロールへ、または深層構造から表層構造へという、表現対象抜き、しかも意志論・規範論の欠除したア・プリオリな過程しか考えられていないから、これらの言語観に立つ限り、ser と estar の区別のような表現の本質に関するような問題を前にしては、全くお手挙げなのである⁽¹⁾。

時枝博士は、江戸時代の国学者鈴木胤(あきら)の言語観に着想を得て、過程的構造の相違によって表現内容を概念化して表わす客体的表現(詞)と表現内容を概念化せずそのまま直接表現する主体的表現(辞)とに、品詞が二大別されることを発見した⁽²⁾。フランスにおいても17世紀にいわゆる『ポール・ロワヤル文法』において、この重要な発見がなされていたが、当のフランスの言語学者達はこれを再発掘できないでいるし、アメリカではかのチョムスキーがトンチンカンな評価をしているありさまである⁽³⁾。

以下、時枝博士や『ポール・ロワヤル文法』の教えに従って ser と estar の考察をすすめよう。本論ではスペイン語に話を限定してあるが、イベロ・ロマン語全体にも通じるものがあると信じる。

第1章 copula としての ser と estar

ser と estar は主語と属辞(attribut)とをイコールの関係でつなぎ合わせる機能を有するところから copula と呼ばれているが、このような捉え方は ser と estar の本質的理解に立脚していない。皮相的な機能的現象に立脚して立てられた両者の使い分けの原則、即ち ser は永続的性質を(例1)、estar は一時的性質を表わす(例2)というような原則は、これに反する用例(例3)の前に一文の価値もなくなる。

例1 El hielo es frío. (『スペイン語便覧』より)

例2 El agua está caliente. (ibid)

例3 ¡ Qué feliz he sido aquellos minutos !

(R. K. Spaulding. *Syntax of Spanish Verb*, p. 20)

そもそも ser それ自体に永続的性質を表わす機能があるかのように考えるのが間違っているのであって、主語に立っている名詞がいかなる対象のいかなる側面をとらえているかを考えなければならないのである。例1では具体的な氷ではなく、氷一般即ち氷の普遍的側面を捉えて El hielo といっているのであるからその属性も永続的側面が語られているのであり、例2においては、水の具体的な特殊相が問題になっているのである。名詞は普遍概念でも特殊概念でも全く同じ形式をとって現れ、冠詞もまた同じ顔(定冠詞)をしているので、このような潜在的なことに気付くことが困難なのであるが、形式にとらわれずに、同一形式の背後にある内容の相違を、過程的構造をたぐって見極めなくてはならないのである。同じ形のいわゆる固有名詞を主語に持つ文でも、Juan es borracho. と Juan está borracho. (『便覧』p.138) とでは、同一人物 Juan の普遍的側面を捉えているか一時的な特殊側面をとらえているかの違いがある。

ser と estar の区別も過程的構造の相違に求められるべきである。主語＋自動詞＋属辞の構文をとる他の自動詞(parecer, permanecer, caer etc.)とも比較して見れば分るように、estar は ser と同列に並べるよりも、むしろこれらの自動詞と同列に論ずるべきであろう。ser からは客体的表現(詞)としての意味内容が全く抽出できず、いわば「透明」なのであるが、他の自動詞の語幹からは、それぞれ、parecer = 外観の様子、permanecer = 状態の持続、caer = 急激な変化というように客体的表現の意味内容が抽出できる。estar はこれらの自動詞と比べると限りなく透明に近くて非常に抽象的であるが「状態」という概念化された客体的表現が抽出できるのである。

ser は実は「透明」なのがあたり前であって、表現主体の判断という主体的表現がもろに出たものなのであるから、表現の本質上、他の動詞とは根本的に異なるのである⁽⁴⁾。一般の動詞においては、活用語尾としてしか主体的表現は現われず、しかも時称や法が人称語尾という客体的表現と分ち難く融合して表われ、判断そのものはゼロ記号としてしか現われない。

estar は状態を表わす客体的表現であるからこそ、実体の一時的属性をとらえた表現につかわれやすいし、ser は主体の判断を表わすが故に、とくにいわゆる超時間的用法といわれる直説法現在形によって、普遍概念の判断に用いられる傾向があるわけである。

第2章 存在を表わす ser と estar

ser の源をたずねるとラテン語の esse にたどり着く。esse には表現主体の判断を表わす主体的表現の用法のほかに実体の存在を表わす客体的表現の用法があった。esse は俗ラテン語で essere となり、イペロ・ロマン語においては不定法形はすべて活用語尾にアクセントを持つという特殊事情によって essere にもアクセントの移動があり、発音と意味の上で essere に非常に近かった seer (<ラテン語

sedere)と混交が起って、これが現在の ser となった。

このような歴史的背景をもっている関係上、ser は判断の主體的表現を専ら引き受け、存在の客體的表現は他の動詞、例えば estar (＜ラテン語 stare)や hay (haber の非人称〔単人称〕的用法)に譲ったものの、いまだに存在を表わす用法を若干保持している。ハイデッガーの『存在と時間』をスペイン語では ser y tiempo というし、デカルトの「我思フ故ニ我在リ」(Cogito ergo sum.)は Pienso, luego soy. となり、旧約の中の創世記第1章第3節「神光あれと言ひたまひければ光ありき」は Y dijo Dios : Sea la luz ; y fue la luz. となる。実体の具体的な在り方ではなく抽象的に存在を捉えたときに ser が用いられ⁽⁵⁾、具体的に存在を表わすときは estar (特殊的存在の表現)や hay (個別的存在の表現)が用いられる。先の創世記の引用部分も光を具体的にとらえて、Y dijo Dios : Haya luz ; y hubo luz. と訳している聖書もある。また、

例4 Hoy es la fiesta. (『便覧』p.140)

のような用例において、(この種の文については後に触れるような問題があるが)この ser はよく「行われる」「起る」という意味に解されているのであるが、もともと ser にそのような意味があるわけではないから、祭りの具体的な過程や属性の表象を捨象して単に存在として把握したために ser が用いられるのだと解すべきである⁽⁶⁾。

ところで、従来の文法書が例4のように「行われる」「在る」の意味に解釈している ser の用法で、実はそのような客體的表現ではなく、判断の主體的表現ではないかと思われるものが少くない。私事にわたるが、このことは筆者が受験浪人時代に笠井鎮夫氏のNHKスペイン語講座を聴いているころから、つまり時枝学説など全く知らないときから、理論的支えのないまま直感的に気付いていたことなのである。どのスペイン語文法書に当たってもそれを裏付けてくれる記述が見当らず今日に至っていることなのである。時枝学説を知るに及んで我が直感を裏付ける論拠がやっと見付かった思いがするのであるが、読者諸氏の科学的でまじめな批判検討をぜひ仰ぎたい。

例5 La pelea había sido en mitad del campo. (Syntax, p. 21)

例6 La última vez que los vimos...me parece que fué en una fiesta. (ibid.)

例7 La escena es en Alminar de la Reina, ciudad andaluza. (ibid.)

例8 Donde usted tendrá mil ocasiones de verle es en casa de sus hijos. (ibid.)

上例のうち、例5の ser は存在の客體的表現と考えられなくもないが、例6においては判断を表わした主體的表現と考えるべきである。例7は戯曲のト書きであるが、具体的に場面の位置が示されているにもかかわらず ser が用いられているのは、場面の位置についての判断を表わしているのである。つまり「場面は……においてである」といっているのである。例8に至っては ser は判断の表現であることに疑いを容れまい。

注

- (1) 時枝学説は、後に三浦つとむ氏による批判的発展を経て、学説の誤謬（規範論の欠除、機能主義的偏向等）が一掃された。三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫，1976）参照。
- (2) 上掲書，p. 75 以下及び時枝誠記『国語学原論』p. 229 以下参照。
- (3) 日本においては宮下真二氏がポール・ロワヤル文法の正当な再評価を行っている。宮下真二「構造言語学の変形としての変形文法」雑誌『試行』1970年31号（東京，試行社）または同『英語はどう研究されてきたか』（東京，季節社，近刊）
- (4) C・ランスローほか（南館英孝訳）『ポール・ロワヤル文法』（大修館，1972）p. 106 参照。
- (5) *ser* にも古スペイン語のいわば化石として、具体的存在を意味する用法が残存してはいる。高橋正武『新スペイン広文典』（白水社，1970）p. 388 参照。
- (6) 三浦つとむ，上掲書p. 151 参照。

引用・参考文献

例文は主として次の2書から引用した。

R. K. Spaulding, *Syntax of the Spanish Verb* (Liverpool Univ. press, 1958)

会田由ほか『スペイン語便覧』（評論社，1963）

本論を編むに当っては上記2書のほか次の文献を参照した。

P. Bec, *Manuel pratique de philologie romane* (Paris, Picard, 1970)

R. Lapesa, *Historia de la lengua española* (Madrid, Escelicer, 1959)

E. Bourciez, *Eléments de linguistique romane*, (Paris, Klincksieck, 1967)

高橋正武『新スペイン広文典』（白水社，1970）

Sur les deux verbes espagnols ser et estar

Satoru SUZUKI

Dans ce bref essai nous avons essayé, en nous basant sur la théorie de M. Tokiéda, théorie qui s'accorde d'ailleurs avec la pensée linguistique de la Grammaire de Port-Royal, de révéler la différence essentielle entre les deux verbes espagnols ser et estar.

L'emploi copulatif de ser n'est autre que l'expression directe et subjective du jugement (ou de l'affirmation) du sujet parlant, tandis que le estar copulatif est une des expressions objectives qui se réalisent par l'intermédiaire de la conceptualisation des objets à exprimer, et par conséquent, doit être classé dans le groupe de verbes intransitifs suivis de l'attribut.

Le ser exprimant l'existence se diffère de estar en ceci de particulier que le premier exprime l'aspect universel et abstrait de l'être en général, l'aspect particulier et l'aspect individuel de l'être s'exprimant par estar et la forme impersonnelle de haber.

Enfin nous avons montré que traditionnellement on considère à tort comme signifiant existir un certain emploi de ser qui, à la vérité, exprime le jugement (ou l'affirmation) du sujet parlant.